

主に「健康な心と体」が育った実践

活動名 みんなでもっとおもしろくしよう -巧技台遊び- (10月)

保育者の願い（ねらい）

- ・巧技台を使いながら多様な動きを経験し、元気な体づくりをする。
- ・巧技台遊びを通して自ら進んで体を動かし、進んで取り組んだり挑戦したりする意欲を育てようとする。
- ・自分のやりたいことを言葉で表して、自分の思いを相手に伝えようとする。
- ・友達と協力して楽しい巧技台の場を作り、友達と一緒に活動する満足感を味わう。

援助のポイント

- ・グループごとに「ホワイトボード・巧技台マグネットパーツ」を用意し、グループで「巧技台を使ってどんな場にするか」を視覚情報を基に、お互いの願いや思いを表現できるようにする。
- ・いろいろな渡り方や安全な降り方などをしている子供を見付け、そのやり方などを全体で共有し、動きのバリエーションが増えるようにする。
- ・巧技台の中に「ゴム紐ハードル」を取り入れ、自分のできる動きや、取り入れてみたい動きの場を作ることができるようにする。
- ・巧技台遊びの中で、子供たちができるようになったことや、頑張っていることを認めたり、共に喜んだりする。



環境構成の工夫

- ・安全に活動ができるよう、グループごとの巧技台の間隔を十分確保する。
- ・スタート地点のケンステップで前の友達の番が終わるのを待ち、「いいよー！」と言われてからスタートするという約束をつくる。
- ・グループごとに考え、工夫してつくった巧技台の場をお互いに体験する時間を設け、多様な動きや難度の高い動きにも楽しんで取り組めるようにする。
- ・巧技台の準備や片付けが安全で素早くできるよう子供が動かしやすいように並べ、配置場所に写真を掲示する。



これまでの経緯

- ・運動会や保育参観で巧技台で活動する様子を発表した。
- ・巧技台でいろいろな動きをして遊んだ後、「年少組さんを招待しよう!」と呼びかけて、どんなコースをつくとよいか考えた。自分たちの遊びの経験を基に、「これだと年少さんには難しいかな?」と話し合いながらコースづくりを考えることができた。
- ・保育者が「ホワイトボード・巧技台マグネットパーツ」で表したとおりに作った実際の巧技台のコースを見た。



当日の活動内容

- みんなで準備運動をする。
- グループごとに「ホワイトボード・巧技台マグネットパーツ」を使いながら、どのような巧技台の場にするか話し合う。
（「階段入れる?」「ここにマットを置いて…」等）
- グループごとにホワイトボードを参考にしながら協力して巧技台の場作りをする。保育者は、安全に気を付けて準備ができるよう声をかけたり手伝ったりする。
- 巧技台の場作りができたグループから巧技台遊びを始める。
- 全グループの準備ができたなら、グループごとに今日作った巧技台の場についてホワイトボードを示しながら紹介をする。保育者はその巧技台の場のおもしろさや良さがみんなに伝わるよう、話の補助を随時行う。
- 自分たちで作った巧技台の場だけでなく、友達の作った場も含め、フロア全体を使って遊ぶ。保育者は安全に巧技台遊びができるように、補助をしたり、約束（ケンステップからスタート・巧技台の終わりまで着いたら「いいよー」と声をかける等）を守れるよう声をかけたりする。
- 保育者がクラス全体に広めたい動きが見られた時には、全員を集めて、その動きを紹介する。
- グループごとに安全に気を付けながら協力をして片付けをする。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 様々な巧技台を組み合わせた場でいろいろな動きをして活動したり、これまでできなかったことにめあてをもって取り組んだりする姿が見られた。（健康な心と体）（自立心）
- 様々な巧技台でより楽しい場を作るためにグループの友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりして話し合っていた。（言葉による伝え合い）（豊かな感性と表現）
- 巧技台の場づくりをする際に、いろいろな形と大きさのある「巧技台マグネットパーツ」をホワイトボードに貼っていた。（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）
- いろいろな巧技台を協力して準備したり、片付けたりした。（協同性）



小学校教育とのつながり

- 巧技台でいろいろな動きをして遊ぶことは、体力の向上や、体育における技能の習得（器械運動等）につながります。
- 巧技台を模したマグネットをホワイトボードに貼ったり、それを基に話し合ったりすることは、小学校の学習（形づくり・算数的活動等）につながります。
- 巧技台遊びを通じて、ルールを理解し守ろうとする姿は、道徳性や安全意識の育成につながっています。



主に「健康な心と体」が育った実践

活動名 どちらがたくさん入ったかな -玉入れ遊び- (10月)

保育者の願い(ねらい)

- 玉入れ遊びをする中で、投げることの楽しさや、ねらったかごに入った時の喜びを感じ、体を動かすことの楽しさや満足感を味わう。
- 玉を投げるときに、下に投げつけるのではなく遠くに投げようとする意識をもつようになる。
- 球の投げ方などを友達同士で教え合ったり、よいところを認め合ったりしようとする。

援助のポイント

- 活動中にBGMを流して場の雰囲気づくりをすると共に、子供たちに活動の始まりと終わりがわかりやすいようにする。
- 「玉を投げてみる」ことから始めて、「自分で投げる距離を決める」、「対戦形式の玉入れ遊びにする」、「『果物』玉入れにする」等、子供たちが飽きずに意欲をもって活動に取り組めるよう、少しずつ遊び方やルールを変えて遊べるようにする。
- 玉入れ遊びの中で、「どんな風に投げたの?」「どこを見て投げたの?」等と聞き、意見を伝え合うことでクラス全体の場で投げるコツを共有できるようにする。
- 活動の中で子供たちの頑張りや気付き、望ましい行動を認め、他児にも知らせていく。



環境構成の工夫

- 子供たちが安全に、十分に体を動かせるよう、広い空間をとるようにする。
- 子供たちが遠くに投げる動きを楽しめるよう、手におさまり、投げやすい玉入れの玉(紅白玉)を使う。また、子供たちが目標をもって意欲的に投げられるよう、投げ入れられる大きさのかごを準備する。
- 室内で子供たちが自分の投げる場所を視覚で確認できるよう、全員の子供の足下にマーカーを置く。
- 2チームに分かれて対戦する時には、安全に玉入れ遊びができるよう、順番を待つ子供たちはステージで見たり応援したりするようにする。



これまでの経緯

- 「中当て」(四角の中の友達を外の数人がボールを投げて当て、当てられたら交代)をする。
- 「赤白中当て」(ドッジボールのコートを赤と白に分けて、赤チームと白チームがそれぞれ色の違うチームの友達にボールを当てる)をする。
- 7月からドッジボールをする。
- 9月に運動会で玉入れをする。

当日の活動内容

- みんなでダンスをしながら準備運動をする。
- ダンスをした円の隊形の真ん中にかごを置き、運動会で使った玉を使ってかご入れ玉入れをすることを話す。どのように投げるとよいか子供たちの考えを引き出す。
- 始めは、かごまでの距離を短くして、玉が入る経験ができるようにする。保育者は子供たちの思いを聞きながら、かごまでの距離を変える。また、「みんなが決めたところから投げよう」と話して、足下のマーカーを動かして、自分に合った距離から投げられるようにする。
- 2つのチームに分かれて、やり方とルールを確認してから、対戦形式の玉入れ遊びをする。
- 玉入れ対戦の後、2つのチームそれぞれのかごに入った玉を使って、数をみんなで数え上げたり、どちらの数が多いか比べたりする。
- 保育者が作成した「果物」を取り出し、玉入れの中に加える。
『果物』が1つ入ると、玉5個分」というルールを加え、子供たちに作戦を考えるように話す。
- 勝負がついた後は、みんなの頑張りを認め、全員を励ます。
- みんなで紅白玉や「果物」の片付けをする。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- かごに向かって紅白玉を力いっぱい投げていた。 (健康な心と体)
- 投げ入れる距離を自分で決めていた。 (自立心)
- 最後まで諦めずに紅白玉をかごに入れようと頑張っていた。 (自立心)
- 同じチームの友達と力を合わせて玉入れに取り組んでいた。また、違うグループの友達を応援したり、お互いの頑張りを認め合ったりした。 (道徳性・規範意識の芽生え) (協同性)
- 時間やルールが分かり、ルールを守って玉入れに取り組んだ。玉入れの勝敗に関わらず、自分の気持ちを調整し、友達と楽しく遊ぶことができていた。 (道徳性・規範意識の芽生え)
- 玉を上手に投げるコツを言葉で表現して話したり、友達に聞いた玉を投げるコツをいかしたりして玉入れ遊びに取り組んでいた。 (言葉による伝え合い)
- 入った玉の数を数え、勝敗を決めていた。 (数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)



小学校教育とのつながり

- 玉入れ遊びを通して、運動遊びの楽しさに触れ、進んで取り組むことは、体力の向上につながります。
- 玉を下に投げつけるのではなく遠くに投げようとする動きは、体育のボールゲームにつながります。玉を投げてかごに入る喜びを味わったり、チームで玉入れをして競い合ったりすることにより、楽しく「投げる」練習ができます。
- 運動遊びを通してルールを守り、みんなで楽しく遊ぼうとする経験は、道徳心や安全意識の育成につながっています。



主に「健康な心と体」が育った実践

活動名	「新聞紙玉転がしゲーム」をしよう（11月）
-----	-----------------------

保育者の願い（ねらい）

- ・全身を使って進みながら、思い切り息を吹きかけて新聞紙の玉を転がす遊びの楽しさを感じることができる。
- ・息を吹きかけるとより転がりやすい新聞紙の玉の作り方や、より遠くまで転がすことのできる息の吹きかけ方を考えながら、試行錯誤をして遊ぼうとする。
- ・遊びのこつを言葉で表現したり、その考えに興味・関心をもって聞いたりしようとする。
- ・きまりを守って遊んだり、息を吹いても新聞紙の玉が転がらない友達を助けてあげたりして、みんなで楽しく遊びたいという気持ちをもとうとする。

援助のポイント

- ・「うれしい」「悔しい」「できるようにになりたい」など、自分の思いを言葉で表現できるように助けたり、それを受け止めたりする。
 - ・遊びの合間に「新聞紙玉転がしゲーム」のコツ（新聞紙の玉の作り方や、息の吹きかけ方等）を言葉で表現させたり、それを聞かせたりして、みんなで考える場を設けさせるようにする。
- 



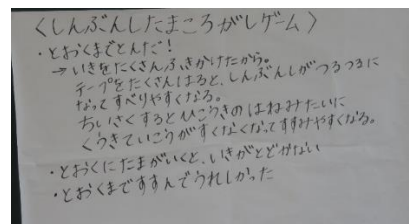
環境構成の工夫

- 安全に遊ぶことができるよう、室内の机やいすを端に寄せて広い空間を取り、安心して遊べるようにする。
- ビニールテープでスタート・ゴールラインを分かりやすくしたり、ゲームの際の動きを一方通行にしたりして、子供たちが安心して遊ぶことができるようにする。
- 活動の場のすぐ側に、多くの新聞紙やテープを準備して、息を吹きかけるとより転がりやすい新聞紙の玉を試行錯誤して作ることができるようにする。
- 遊び以外の時はマスクを付けて飛沫対策を講じるようにする。



これまでの経緯

- 新聞紙を使った制作ごっこ（折り紙と併せて「果物」作り等）や、ちぎった新聞紙を袋に詰めてボールにした遊び、じゃんけんをして負けたら新聞紙を折りたたんでいく遊び等、新聞紙を使う遊びに親しんできた。
- 新聞紙の玉を自由に作って、息を吹きかけて飛ばす遊びをさせた。遊びを通して気付いたことを言葉で表現したり、聞いたりすることで、その後の「新聞紙玉転がしゲーム」を楽しむための手掛かりとした。



当日の活動内容

- みんなが楽しく、安全に遊ぶための「新聞紙玉転がしゲーム」のルールを聞く。
- どうしたら遠くまで転がる新聞紙玉になるか考えて、いろいろな新聞紙の玉を作る。
- 自分で作った新聞紙の玉に息を吹きかけながら転がして進み、誰が早くゴールまでたどり着くかタイムを競うゲームをする。
- ゲームの合間に、新聞紙やテープのある場所で息を吹きかけてより転がりやすい新聞紙の玉はどんなものかを考え、試行錯誤して作り直す。
- ゲームの合間にクラスみんなを集めて、上手に新聞紙の玉を転がすことができる子供に「どんな玉を作ったか?」「どのように吹いているのか?」を聞いて、みんなでそのコツについて話し合いをする。



※今後の展開として、チーム（グループ）対抗戦や、いろいろなコースを作って新聞紙の玉を転がしたりするゲームに発展させて遊ばせる。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 思いきり息を吹きかけて新聞紙の玉を転がしたり、進む新聞紙の玉を全身を使って進みながら追いかけたりしながら楽しく遊ぶ姿が見られた。（健康な心と体）
- 息を吹きかけてよく転がる新聞紙の玉を、大きさやテープの巻き方、重さ等を考えて、工夫を凝らして作っていた。（思考力の芽生え）（豊かな感性と表現）
- ゲームの中で、勝ったり負けたりしながらも、自分の気持ちを調整し、ルールを守って友達と楽しく遊んでいた。（道徳性・規範意識の芽生え）（社会生活との関わり）
- 新聞紙の玉を吹いて思うように飛ばすことができなくても、最後まで諦めず、ゲームに粘り強く取り組む姿が見られた。（健康な心と体）（自立心）
- 「新聞紙玉転がしゲーム」のコツを言葉に表現して伝えていた。（言葉による伝え合い）
- 友達と一緒に仲良く楽しんで遊ぶことができていた。（協同性）



小学校教育とのつながり

- 息を思い切り吹いて新聞紙の玉を転がすことは、心肺機能や体力の向上につながります。また、新聞紙の玉を吹きながら継続して進めるために、体を低い姿勢で保つことも、体力の向上につながります。
- 息を吹きかけて転がる新聞紙の玉作りは、生活科のおもちゃ作りや図画工作の工作の学習につながります。
- 室内で安全にあそぶためにルールを守って遊ぶことは、学級活動の「よりよい人間関係の形成」につながります。
- 運動遊びを通して、ルールを理解し、それを守って遊ぼうとする姿は、道徳性や安全意識の育成につながっています。



主に「自然との関わり・生命尊重」が育った実践

活動名 やもりがいたよ！ （9月）

保育者の願い（ねらい）

- ・生きものに興味や親しみをもって関わり、関心を高める。
- ・生きものの飼育をとおして、命あるものの存在に気づき、大切にしようとする。
- ・生きものを飼育し、観察することをとおして、生きものの変化や特徴に気付く。
- ・生きものの飼育の方法について調べたり、考えたりしたことを伝え合おうとする。

援助のポイント

- ・子供たちが生きものと出会い、飼育をしている時の思いや気持ちを感じ取りながら、子供たちと共に驚いたり感動したりする。
- ・子供たちが何気なくつぶやく言葉を見逃さず、そのつぶやきの基にある思いを大切にする。
- ・子供たちの「こんなことがしたい！」という思いを最大限に尊重して、それを実現できるようにする。

環境構成の工夫

- ・子供たちの「こんなことをしてみたい！」という思いを大切にして、そのような体験ができるよう、道具や素材等を準備しておく。
- ・クラスの友達同士で思ったことを言葉にするのを手伝ったり、みんなでその話を聞く場を設けたりして、みんなで考え、伝え合う場をつくるようにする。

これまでの経緯

- ・4月に「アリを飼いたい」と子供から提案があった。飼育の方法を図鑑で調べて飼育を始めた。
- ・5月に子供がアメンボを捕まえ、飼育ケースに水を入れて飼育を始めた。他の子供たちも、飼育ケースの中の水の上を上手に動くアメンボに関心をもち、みんなでアメンボの飼育をすることになった。子供たちは、自分たちで飼育の方法を図鑑等で調べ、協力して飼育をした。しばらく飼育したが、アメンボは死んでしまった。「どうすれば元気に生きられたのか」をみんなで話し合った。子供たちはアメンボの気持ちになって考え、「きちんと餌をあげればよかった」「もっと広い場所で育ててあげればよかった」という考えが出た。それから、みんなでアメンボのお墓をつくった。
- ・カブトムシの飼育をした。図鑑で調べて、飼育ケースに土を敷き詰めて飼育環境を整えた。カブトムシの餌も調べてみんなで準備をした。いろいろな餌をあげたところ、「ゼリー」に土が被っていたり、よく減っていたりすることに気付いた。夏休みの間に飼育ができなくなるカブトムシをどうするかをみんなで話し合った。その結果「樹液の出てる木に逃がそう」と決めて、自然に返した。



9月の活動内容

- ・9月の始めに遊戯室でやもりを見付け、飼育を始めた。
- ・やもりの飼育の方法を、図鑑を使って調べた。園庭で拾った砂や木の枝や落ち葉、廃材コーナーのカップ等を使って自分たちだけで飼育環境を整えた。
- ・保育者は、子供たちの主体的な行動を見守った。
- ・みんなで飼育をする中、「やもりがやせている!」と、やもりの変化に気が付き、やもりのことを心配した子供たちはどうすればよいか話し合った。
- ・子供たちは、アメンボやカブトムシを飼育した時のことを思い起こしながら、自分たちで「ヤモリを逃がしてあげる」ことに決めて、自然に返した。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- ・やもりやアメンボ等の生きものを大切に飼育していた。(自然との関わり・生命尊重)
- ・カブトムシやアメンボが元気に生きていくためにどうすればよいのかを考え、友達と話し合っていた。(自然との関わり・生命尊重)(協同性)(言葉による伝え合い)
- ・生きものを大切に飼育するための方法を調べていた。(自然との関わり・生命尊重)(自立心)
- ・アメンボやカブトムシ等の生きものが元気に生きるために、餌の準備をしたり、飼育の環境を整えたりしていた。(自然との関わり・生命尊重)(豊かな感性と表現)
- ・クラスの友達と協力して生きものの飼育をしていた。(自然との関わり・生命尊重)(協同性)



小学校教育とのつながり

- ・生きものに愛情をもって育てたり、その生きものを大切に育てるためにどうするとよいのかをみんなで話し合ったりする体験は、特別の教科道徳の「生命の尊さ」・「自然愛護」の学習につながります。
- ・身近な生きものに興味・関心をもって、その飼育の方法を調べたり、飼育をしたりする体験は、理科の「生きもの」に関する学習につながります。
- ・生きものの飼育の方法について、図鑑などを使って調べることは、国語の「読むこと」の学習につながります。



主に「自然との関わり・生命尊重」が育った実践

活動名 蚕を育ててできた繭玉でお花作りをしよう (11月)

保育者の願い(ねらい)

- ・蚕の飼育をとおして、命の大切さに気付き、身近な生き物を大切にしようとする。
- ・生き物の成長を楽しみながら、その変化する様子に気付き、その不思議を感じ取りながら、生き物への興味・関心を深める。
- ・自分の考えを言葉にして表現すると共に、友達の考えも聞きながら、遊びを深めようとする。
- ・「お店屋さんごっこ」や「お店体験」をとおして、人に役に立つことができる喜びや、周りの人を大切にしようとする気持ちをもとうとする。

援助のポイント

- ・子供たちが表現する一人一人の発想や思いを丁寧に受け止め、安心して自分の考えを表現できるようにする。
- ・子供たちがお互いの考えを十分に伝え合えるよう、側について見守り、必要に応じて言葉にするのを手伝ったり、話し合いの仲立ちをしたりする。
- ・蚕の飼育や繭玉を使ったお花作りで頑張っていることを認めたり、できなかったことができるようになったことを共に喜んだりして、これからの遊びや活動へのやる気につなげていく。

環境構成の工夫

- ・蚕を育てやすいよう、園庭に蚕の餌となる桑の木を植えておく。
- ・育ててきた蚕の繭等を見えるところに置いておき、これまでの活動とこれからの活動のつながりが分かりやすいようにする。
- ・今までの活動(ひまわりの種から油取り、焼き芋づくり、紙作り等)を掲示物としてまとめ、今までの活動を振り返ることができるようにする。
- ・制作活動を十分に楽しめるよう、広いスペースや十分な時間を確保する。
- ・子供たち一人一人のイメージを実現できるよう、必要な道具や素材を豊富に用意しておく。



これまでの経緯

- ・日本の伝統産業の「養蚕」に興味・関心をもつことができるよう、毎年蚕の飼育をし、「蚕の卵～幼虫～繭玉作り」のサイクルを観察してきた。
- ・園内で育てている桑の木の葉をはさみで切って小さくして、蚕に餌やりをする中で、「どんどん大きくなっていくね」「糸が出てきてるね」と、蚕の成長や変化に気付き、それを友達同士で伝え合うことを楽しんだ。
- ・完成した繭玉を使って何を作りたいか話し合いをした。そうして「ふわふわしてお花みたい」「ここが花びらになりそうじゃない?」「お花ができたなら、お洋服につけられるようにしたい」というアイデアが出た。
- ・「繭玉を使ったお花」のイメージを実現させるために、その作り方を調べたり考えたりした。



当日の活動内容

- 花のつくりを思い出しながら、お花のコサージュの作り方をみんなで確認する。
- 役割を分担して、繭玉を使ったお花のコサージュ作りをする。
(1「繭玉をほぐす」2「茎を通す」3「安全ピンをつけ、袋詰めをする」)
- 袋詰めされたお花のコサージュで、お店屋さんごっこをして遊ぶ。



※今後の展開として、「お店屋さんごっこ」や「お店体験」をするために必要なものを考えたり用意したりする。そして、どんなお店にするかを考えたり、お店屋さんになるための挨拶の仕方を練習したりする。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 蚕に忘れずにエサをあげたり、その様子を観察したりして、その命を大切に守り、育もうとしていた。
(自然との関わり・生命尊重)
- 蚕の成長や変化を見て気が付いたり驚いたりしたことを友達と伝え合っていた。
(自然との関わり・生命尊重)(言葉による伝え合い)
- 繭玉を見たり触ったりして、「ふわふわしてるね」「思ったより硬いんだね」等、気付きや発見を言葉に表して友達と共有していた。
(思考力の芽生え)(言葉による伝え合い)
- 「どうやってやるの?」「ここを持って、こうするんだよ」と、お互いに教え合いながら最後まで粘り強く繭玉のお花作りをしていた。
(道徳性・規範意識の芽生え)(自立心)
- 繭玉のお花作りをしながら「〇〇ちゃんが作ったお花、きれいだね」と、お互いの頑張りの取り組みの良さを認め合っていた。
(協同性)(言葉による伝え合い)
- 「お店屋さんごっこに必要な物は何か」をみんなで話し合って考え、お互いの発想を認め合いながら用意していた。
(社会生活との関わり)(言葉による伝え合い)(思考力の芽生え)
- お店屋さんごっこやお店体験で「いらっしゃいませ」「お花のコサージュを売ってますよ」「一つ百円です」と接客をしたり、「お客さんから見て、こんな風に置いた方が見やすいよ」と考えたりして楽しんでいた。
(社会生活との関わり)(思考力の芽生え)(協同性)



小学校教育とのつながり

- 生き物の成長の様子やその変化を観察することは、生活科や理科の「生きもの」に関する学習につながります。
- 生き物を大切に育てる体験は、特別の教科道徳の「生命尊重」や「自然愛護」の学習へつながります。
- 繭玉を使ったお花作りではさみを使ったり、針金を通したりする体験は図画工作の学習につながります。
- クラス全体で同じ目標に向かって話し合ったり協力したりする活動体験は、小学校生活でよりよい学級を形成するための基礎となります。



主に「思考力の芽生え」が育った実践

活動名

自分の考えたロケットをとばそう

(11月)

保育者の願い（ねらい）

- ・身近な物や自然に興味をもち、進んで見たり触れたりして発見を楽しめるようにする。
- ・様々な素材で自分のイメージを形にして遊びを楽しめるようにする。
- ・自分の思いを伝えると共に、友達の考えも取り入れながらイメージした物を最後まで作る達成感を味わえるようにする。
- ・興味をもったことに関して、自ら意欲的に調べたり考えたりする中で、知識を深めることの喜びを感じられるようにする。

援助のポイント

- ・子供一人一人の考えや発想を丁寧に受け止め、共感していく。
- ・子供たちに生まれた疑問には、すぐには答えを教えず、自分たちで気付くことができるよう一緒に調べたり考えたりして、発見することの喜びにつなげられるようにする。
- ・子供たちが成功した時には一緒に喜んだり、上手くいかなかった時にはそれまでの頑張りを認めたりして、次の活動への意欲につなげられるようにする。

環境構成の工夫

- ・十分な時間と広い空間を確保し、試行錯誤しながら何度も取り組めるようにする。
- ・子供たちが求める必要な道具を豊富に用意し、子供たちがイメージを再現しながらロケットを作ることができるようにする。

これまでの経緯

- ・虫眼鏡を使い、肉眼では見えにくいものを見ることを楽しむ。
- ・日頃より興味・関心をもったもの（植物・昆虫・石など）を顕微鏡で見ることを楽しむ。
- ・「空に見える月を顕微鏡で見たようにもっと大きくして見てみたい」という思いから、天体望遠鏡を使って月の観察をして楽しむようになる。
- ・月の観察から空や宇宙に関心が向き、子供たちから「空を飛ぶ鳥や飛行機のように自分たちで飛ぶものを作りたい」という思いが生まれる。
- ・遊戯室や園庭で紙飛行機を飛ばし、紙飛行機の作り方や風向きの違いによって、飛び方が違うことに気付いた。
- ・輪ゴムを使った発射台を使うとさらに遠くに紙飛行機が飛ぶ様子から、ゴムの力で遠くにものを飛ばすことができることに気付いた。
- ・風船を膨らませて、手を離して、その風船の飛び方をみんなで見た。そして、空気がたくさん入っている方が高く飛ぶことに気付いた。
- ・子供が、テレビで見た「ペットボトルロケット」のことをみんなに伝えたことから、ペットボトルの実験が始まった。



当日の活動内容

- ペットボトルに、風船と同じように空気をたくさん入れたら飛ぶのかを実験して調べる。そして、ペットボトルが勝手に飛ぶ様子をみんなで見る。
- ペットボトルに、水鉄砲のように水も入れるともっと飛ぶのではないかというアイデアから、ペットボトルに水を入れて、空気を入れていく。そして、ペットボトルが考えたように飛ぶ様子をみんなで見る。
- ロケットに「羽根」がついていることから、ペットボトルにも「羽根」を付けたり、ロケットの先端におもりを付けたりして、飛び方が安定し、より遠くに飛びやすいペットボトルロケットを作る。そして、そのペットボトルが園庭でどのように飛ぶか実験してみる。
- ペットボトルロケットの水の量や空気の量も変えながら、その飛び方の違いを見てみる。
- ペットボトルロケットをもっと遠くに飛ばすために、取り組んでみたいことを考える。



※今後の展開として、もっと科学に興味をもつきっかけを作ったり、本物のスペースシャトルを見たりする機会を設けたりしたいと考えている。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 「ペットボトルロケットを飛ばせる」ことについて、アイデアを出したり、どうなるかを予想したり、考えを巡らせながら、その考えを実際に試してみたりした。 (思考力の芽生え)
- 新しいことを知ったり、発見したり、その面白さを感じ取ったりしながら、もっとやってみようという思いをもつことができた。 (思考力の芽生え) (豊かな感性と表現)
- 「ペットボトルロケットをもっと遠くに飛ばせる」ために、自分のアイデアや思いを言葉にして表現したり、その友達のお話を聞いたりして、みんなで考えを共有することができた。 (協同性) (言葉による伝え合い)
- 自分のイメージを基に、最後まで頑張ってペットボトルロケットを作ることができた。 (自立心) (豊かな感性と表現)



小学校教育とのつながり

- 肉眼でははっきりと見るのが難しいほどの小さなものに興味・関心をもち、虫眼鏡や顕微鏡を使って観察しようとすることは、小学校の理科の学習につながります。
- 物をゴムや風等を使って飛ばそうとする遊びは、小学校の理科におけるエネルギーの学習につながります。
- ペットボトルロケットをより遠くに飛ばせるための方法を考えることは、小学校の理科における「条件統制」の見方・考え方を養うことにつながります。

